

<実践事例>

教育支援研究開発センター

「学生×教員×職員 しゃべり場」活動報告

福原 由衣¹・岡 和寛¹

学生の主体性・多様性・協働性の育成という大学の役割において、個々の学生が正課授業や正課外活動のなかでモチベーションを發揮し、主体的に学べる環境を整えていかなければならない。

そのためには、教育を主導する教員の資質向上や授業改善だけでなく、受け手である学生の学修を感化するプロセスに焦点を当てる必要がある。加えて、新型コロナウイルスの蔓延により、新たな大学教育の在り方が求められている。こうした現状において、教育支援研究開発センターでは、学生の主体性や学習モチベーション發揮に向けた支援を模索するための取組として、「しゃべり場」を実践した。本稿では、令和2年度に春学期と秋学期にそれぞれ1回実施した「学生×教員×職員しゃべり場」の取組と、事後アンケートや第2回の実施にあたって公募した学生スタッフへのヒアリングから見えてきた課題について報告する。

キーワード: 教員－学生間の対話、学生の主体性、学習意欲

1. はじめに

新型コロナウイルスの蔓延により、急遽2020年度春学期の全科目の授業をオンラインで実施し、秋学期になった現在も多くの科目はオンラインで授業を継続している。コロナ禍のオンライン環境では、対面と比べてコミュニケーションが制限される傾向にある。教員や他の学生との関わりが阻害されることにより、学生が学習において何らかの障壁を感じていたり、主体性や学習モチベーションを發揮しにくい状況におかれていることが推察される。

教育支援研究開発センターにとって、コロナ禍における学生の円滑な学習について検討することは本学の教育の質を担保するための重要な課題の一つであり、これを検討するにあたって、①学生のコロナ禍における学習の実態を把握すること、②学生の学習モチベーションへの影響を確認すること、③コロナ禍における学生との対話を実践することが重要と考え、この3点を実施できる場として「学生×教員×職員しゃべり場」をコーディネートした。

本稿では、まず「1.はじめに」で、「しゃべり場」の着想に至った経緯について述べた。次章「2.第1回学生×教員×職員しゃべり場の意図と運営」「3.第2回学生×教員×職員しゃべり場の意図と運営」では、第1回学生×教員×職員しゃべり場、第2回学生×教員×職員しゃべり場のそれぞれの概要、特徴、構成の意図、運営方法について述べる。「4.しゃべり場の意義と効果」では、

しゃべり場での取組を通じて得られた成果についてまとめ、コロナ禍において学生の学習モチベーションをどのように担保していくべきかを考察する。

2. 第1回学生×教員×職員しゃべり場の意図と運営

本章では、第1回しゃべり場の概要、特徴、構成の意図、運営方法について説明する。

2.1. 概要

テーマ: オンラインでオンライン授業を語ろう

日時: 2020年7月29日(水)17:00～18:00

開催形態: Microsoft Teams

参加者数: 31名(学生19名、教員6名、職員6名)

2.2. 特徴

- ①告知、申込方法、参加方法、すべてをオンラインで行った。
- ②学生・教員・職員の三者が参加する。
- ③参加者が主体的に発言しやすい少人数のグループディスカッション形式とした(6～7名/グループ)。

2.3. 第1回学生×教員×職員しゃべり場の構成と意図

教育支援研究開発センターとして、次の3点を意図として第1回しゃべり場および第2回しゃべり場を開催した。

¹ 京都産業大学 教育支援研究開発センター事務室

- ①学生のコロナ禍における学習の実態の把握
- ②学生の学習モチベーションへの影響の確認
- ③コロナ禍における学生との対話の実践

上記の観点から、第1回のテーマとして「オンラインで、オンライン授業を語ろう」を設定した。グループワーク方式で、「しゃべり場に参加した動機」や「良いオンライン授業とは何か」といった質問を通し、学生の学習実態の質的な把握を試みた。しゃべり場自体をコロナ禍における学生との対話実践の場とし、学生の反応を観察しながら、第2回しゃべり場につながるヒントを模索することとした。

2.4. 運営方法

当日の運営は、図1のとおりである。開会挨拶と事務連絡の後、5つグループに分かれてグループワークを行った。可能な限り学年や学部など属性が近い学生同士が同グループになるよう振り分けを行った。また、F工場の職員2名を含め、教育支援研究開発センターの職員5名を、各グループに1名ずつファシリテータとして配置した。

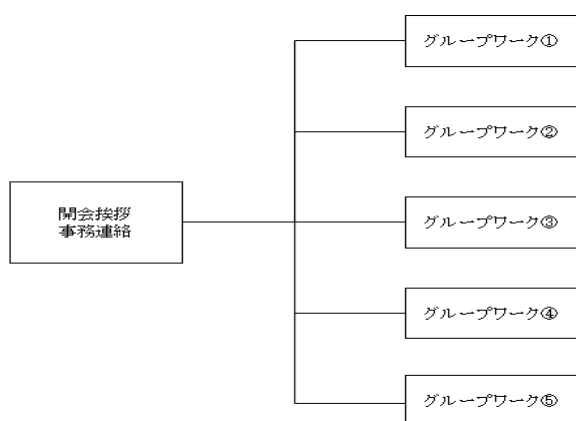


図1. 第1回学生×教員×職員しゃべり場の当日の運営の流れ

3. 第2回学生×教員×職員しゃべり場の意図と運営

本章では、第2回しゃべり場の概要、特徴、構成の意図、運営方法について説明する。

3.1. 概要

日 時:2020年10月27日(火)17:00~18:00

開催形態:Zoom

参加者数:18名(学生10名、教員3名、職員5名)

3.2. 特徴

- ①告知、申込方法、参加方法、すべてをオンラインで行った。

- ②学生中心の場として、教員、職員にも参加を呼び掛けた。
- ③参加者が主体的に発言しやすいよう少人数のグループディスカッション形式とした(6~7名/グループ)。
- ④学生スタッフが企画から実施、振り返りまで関与した。

3.3. 第2回学生×教員×職員しゃべり場の構成と意図

第1回のしゃべり場での気づきを踏まえ、発展段階として第2回の企画を行った。第2回は学生のコミュニケーションに焦点を当てやすくするねらいから、特定のテーマを設定せず参加者の参加動機(話したい内容)を事前収集した。その結果、参加動機から「授業について話したいグループ」「学生同士でコミュニケーションを取りたいグループ」のそれぞれ2グループずつ、計4グループに参加者を振り分けた。

また、第2回は有志の学生スタッフ6名にも参加してもらった。第1回開催時、グループ内で自発的に発言してくれる学生の存在がコミュニケーション促進のきっかけになったことから、学生スタッフに促進役を担ってもらうこととした。学生スタッフには、事前にしゃべり場の趣旨説明や研修を実施し、本番に臨んでもらった。また、第2回は、アイスブレイクやアクティブリスニングの導入のため、参加者のカメラオンを参加条件とした。

3.4. 当日の運営方法

当日の運営については、図2のとおりである。開会挨拶と事務連絡の後、「授業に関するグループ」(2グループ)と「学生同士でコミュニケーションを取りたいグループ」(2グループ)、計4グループに分かれてグループワークを行った。「授業に関するグループ」は学生、教員、職員の三者で構成し、「学生同士でコミュニケーションを取りたいグループ」は、学生と職員のみで構成した。各グループに、学生スタッフを最低1名、事務スタッフを学生スタッフのサポート役として各グループに1名配置した。

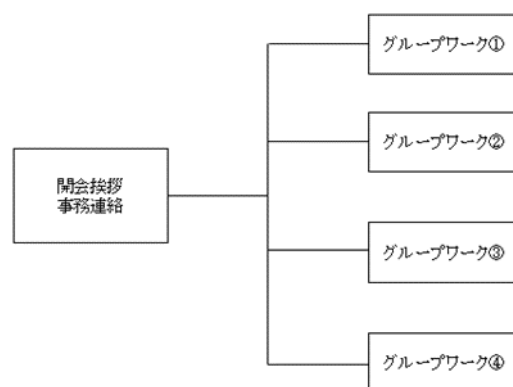


図2. 第2回学生×教員×職員しゃべり場の当日の運営の流れ

3.5. 学生スタッフへのヒアリング

第2回しゃべり場では、終了後に学生スタッフ6名を対象にヒアリングを行った。「学生スタッフとして関わった感想・意見」と「しゃべり場自体がどうだったか」を中心に率直な意見と感想を話してもらった。

4. しゃべり場の意義と効果

本章では、2章、3章で述べたしゃべり場の取組から得られた成果をまとめ、学生との円滑なコミュニケーションに向けて、得られた視点について述べる。

4.1. 学生のコロナ禍における学習の実態

しゃべり場では、学生の声を直接ヒアリングすることを通じて、オンライン授業の物理的・心理的な障壁を明らかにすることができた。例えばある学生は、「パソコンを買ったばかりで、操作は全くできなかった。遠方に住む姉に電話してパソコンについて教えてもらった。履修登録に10時間ぐらいかかった。大学に友人がいれば相談しながらできたかもしれないが、そんな人はいなかった。一人で悩みながらやった」と述べており、オンライン環境に置かれて間もない時期、手続きだけでも相当な労力をかけなければならなかったことが窺えた。

また、「授業でわからないことがあったとき、対面であれば表情や動作で教員が察してくれた。全員がカメラオフの状況ではそれができず、他の学生がどう感じているのかわからないので、自分だけ質問するのに抵抗を覚え、質問できないことがあった」と述べる学生もおり、対面に比べてコミュニケーションが取りづらいつ感じていることもわかった。特に、教員や他の学生との関係作りが十分でない低年次の学生には、この傾向が顕著にみられた。

4.2. 学生の学習モチベーションへの影響

オンライン授業で教員や他の学生とコミュニケーションが十分に取れていないことは、学生の不安を生み、学習モチベーションにも影響を与えている。しゃべり場に参加した学生の参加動機からも、「他の学生がどうしているのか、この状況をどう感じているのか」を知ることで、安心して学習を進めたいという思いが窺えた。

第2回しゃべり場開催時には対面授業が徐々に再開されており、オンライン環境での物理的・心理的な障壁もやや緩和された印象だが、「この課題で本当に学べるのか」、「オンラインでどうやって学びを深めていけばいいのか」といった不安については、現状のコミュニケーションでは解消しにくいようであった。自分の学びのゴールが見えない状況で学習モチベーションを維持するのは難しく、「自分の興味と直接関係がない科目が多い必修科目」においては、特に困難さを感じているようであっ

た。

4.3. 学生との対話のための手掛かり

しゃべり場は、それ自体がオンライン開催であったことから、学生とのコミュニケーションを検討し、実践する貴重な機会でもあった。しゃべり場に参加する学生は、互いに面識を持たない。初対面の学生同士が限られた時間のなかで自己開示できる環境をつくるために、アイスブレイクを兼ねた自己紹介や、職員や学生スタッフが率先して自己開示を行うなど、ファシリテーションの技法を取り入れたことは効果的であった。また、学生が発言する際、うなずきや相槌を多くするなど、非言語コミュニケーションを意識的に取り入れることで発言する学生に安心感を与えることができた。そのため、事前準備として、教職員を含めた参加者全員に対し、「フラットな場」であることを伝え、できる限りカメラオンでの参加をお願いした。また、第2回しゃべり場では、学生スタッフにファシリテータ役を担ってもらうにあたり、オンライン環境で円滑なコミュニケーションを実践するためのポイントを協働で検討した。学生視点の率直な意見や気づきによって、一層工夫を深めることができたと言える。

4.4. 課題

オンライン授業でのコミュニケーション問題はメタ的なものであるため、正課授業以外で問題について話し合う機会を設ける必要があると考えられる。例えば、授業中に発言や反応がないという状況に学生なりの理由があるとしても、それを教員に伝えることができなければ、教員が改善することは難しい。今回のしゃべり場を通じて、コミュニケーションのために一定のルールを設けたり、コミュニケーションの機会を別途設けることでも、ある程度解消されることがわかった。こうした手がかりを元に話し合いの場を持つことはもちろん、このような状況について広く共有することが重要であると考えている。

今回のしゃべり場を通じて得られた手がかりを指針に、改めてコミュニケーション不全について全学的に議論する場を設けるなど、具体的な改善を推進していくことを教育支援研究開発センターの今後の課題としたい。

謝辞

本稿作成において、ご相談に乗っていただいた遠藤美由樹事務長、津野十紫事務長補佐、英訳にご協力いただいたグローバルサイエンスコースの川崎さわか氏、田淵裕梨氏に感謝いたします。

“Student × Faculty × Staff Chat Zone (しゃべり場)” Center for Research and Development for Education Support Activity Report

Yui FUKUHARA¹, Kazuhiro OKA¹

One of the roles that our university is charged with is developing in students qualities of subjectivity, diversity and collaboration.

For this to be achieved, the university must prepare an environment for students that incorporates regular classes and extracurricular activities which can stimulate their motivation for study and voluntary learning.

Focus also needs to be put on quality enhancement of faculty members, whose main role is providing education, class improvements and also processes which have effects on student learning.

Furthermore, the spread of Covid-19 has forced us to explore new roles for university education. Within these circumstances, the Center for Research and Development for Education Support held Chat Zone (しゃべり場) to support students' development of subjectivity and to stimulate their motivation to study.

This paper reports on the first and second “Student X Faculty X Staff Chat Zone (しゃべり場) sessions held respectively in the spring and autumn semesters, issues that became apparent from a questionnaire taken after the sessions and interviews with student staff who applied.

KEYWORDS: Dialogue between faculty members and student, Student's self-governance, Motivation for study

2020年12月23日受理

1 Center for Research and Development for Educational Support Office